

水害の思い出

安孫子 茂

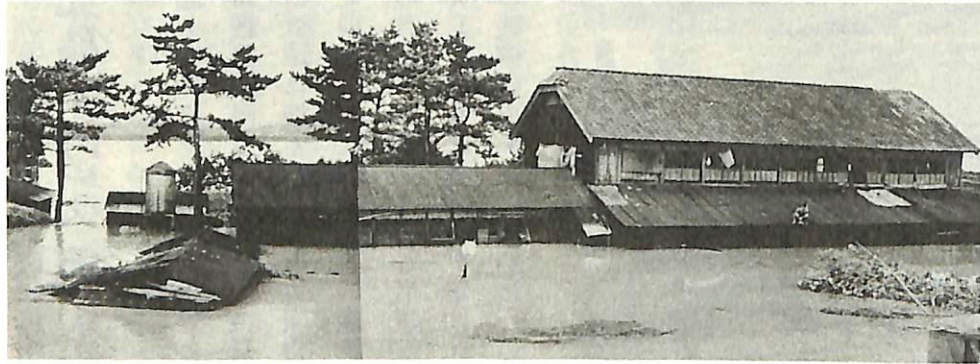
入植五十周年を前に、入植者開拓一世の皆様の苦労は計り知れないと思う。私が子供心に見たり、親からの話などで知っているそれ以上の厳しい苦労ではなかったかと思えます。

これまで大八洲開拓が五十年も長く続けて来たのも、その時々の苦労を協力一致団結し、多くの関係機関の協力とたくさんのおかげでよかったからではなからうか。

私が住む地区の水害が一番の苦難ではないかと思う。私が小学校二年生の昭和三十四年八月十四日、台風七号で利根川が増水し、溢流堤を越し、決壊し、たちまち私達の農場、住宅に濁流が音をたてて流れこんで来た。私はちょうどその時、母と畑に行っていた。地区の人達の「溢流堤が決壊したぞー」という声があったので、急いで家に帰ろうとした時、畑まで濁流が流れて来て、濁流につかりながら家に帰り、父や母は家の家財道具を堤防に運びはじめたが、ほとんどが水の中に消えてしまった。そして、子供達は菅生町の組合事務所に集められた。親達の水害の苦労も知らなげに、無邪気に遊んでいた姿が思い浮かぶ。

それからの二十三年間は、幸にも住宅までの浸水はなかったが、災害は忘れた頃にやってくるのごとく、昭和五十七年八月と九月十二日、この年二回の大水害に見舞われた。この大水害で住宅、畜舎、水田は豊作を期待していた穂波が一瞬にして水中に沈んでしまった。収穫を目前にした水田を見て「どうしてこんなことになるんだ」とつぶやいた。

私達は、酪農で多頭化が進んでいて、牛の避難には大混乱、戦場のようになってしまった。幸にも住民、家畜には被害はなかったが、私達には計り知れないショックだった。この後、数日は仕事を手につかない状態が続いた。しばらくは水が引かないので、牛を牛舎に戻すこともできないので、仮設の搾乳施設を作って、二頭づつ牛を連れてきて搾乳するため、一日中搾乳をする状態が続いた。このような状態が続いたので、牛乳も急激に減り、牛の調子も悪くなってしまった。酪農経営どころではない。そのうちに誰ともなく「とにかく頑張ろう」という声が聞こえるようになった。これまでも、たびたびの水害にも挫けず、幾多の困難に打ち勝って来たのも、流



昭和34年8月14日 7号台風による流作の大水害

作の人達の努力と開拓魂ではなからうか。それと、組合、県の関係機関の指導、協力があつたからこそと思ひます。この大水害の年に、我家ではショックな出来事があつた。

それは、父が病で数年しか生きることが出来ないとい医者に知らされ、目の前が真っ暗になった。

ちょうど、その頃、家を建てる話が進んでいたもので、早く建てることにした。幸に父も新築した家で暮らすことが出来たのが、せめてもの救いだった。それから一年後に父が亡くなり残念でならなかった。

そして、母も六年後に病気で亡くなり、悲しい時期であったが、いつまでも悲しんではいられない。とにかく父の遺志を継いで、酪農で頑張っていこうと心に誓った年だった。長男も二十一歳、後継者としてやる気になっているようなので、あとつぎの環境作りをしなくてはならないと思う。

組合農家の二世から三世に、担い手育成の環境作りが大事ではないかと思う。とくに、流作地区の水害対策を早期に解決することが担い手確保につながり、開拓組合が、全国でも数少ない貴重な組合組織として続くことと思ひます。

大八洲開拓が五十年の長い間続けてこられたのも、開拓一世達の七転び八起きの開拓精神で、幾多の困難を乗り越えて来た歴史があるからで、これから、一世から二世、そして三世へと引き継がれるが、一世の基礎の上に二世がどのような建物を建てるかが私達二世には重要になる。組合員の活性化、組合の存在感が必要であり、一世の残したこの組合を守り、前進し、百周年を目指して頑張ろうではないか。